

愛宕山百韻を読み解く（二）

伊藤浩睦

頼山陽の『本能寺』には、「菱粽在手併菱食」という一節があります。「手ニ菱粽在リテ菱ヲ併セテ食フ」と読みますが、粽は「ちまき」であり蒸し米を握ったものを言い、菱は真菰のことで、菱粽は蒸し米を真菰の葉で包んだものです。今は粽は端午の節句以外には食べませんが、当時は携帯食として常に食べられていました。愛宕山で昼食に出された菱粽を、思案に暮れていた明智光秀は、剥かなければいけない真菰の葉ごと食べてしまったという逸話があります。

頼山陽はその逸話を詩に取り込んでいるのですが、粽を葉ごと食べてしまう思案の末に出たのが次の発句でした。

ときは今天が下しる五月哉 光秀

発句としての調子は良いのですが、言っている内容としては、五月雨が降っているというだけのことで、別段なんのことはありません。

連歌の発句は当季が約束なので、五月二十四日の連歌会ですから、「五月哉」で良く、発句としては標準的で見過ごせばなんの問題もないのです。

脇句は客である愛宕山威徳院行祐が付けます。

水上まさる庭の夏山 行祐

雨が降り続けているから庭の夏山を囲む池の水が増えてきているという付けで、発句の季節の内容を引き継いで、脇句の約束通りに下七は体言止めにして、夏を入れて発句の季節を確認しており、標準通りの脇句になっています。

第三は、座の捌き役である連歌師の里村紹巴です。紹巴は、当代随一の連歌師と言われている人です。花落つる池の流れをせきとめて 紹巴

連歌を知らない人が見ればなんのことはありませんが、知っている者が見れば仰天の内容です。

連歌は記録をするために懐紙を四枚使います。それを二つに折って折り目を

上にして句を書くのですが、その数は決まっています、初折の表に八句、初折の裏に十四句、二の表と裏にそれぞれ十四句、三の表と裏にそれぞれ十四句、名残りの表に十四句、名残りの裏に八句を書きます。

恋の句と花の句が最も華やかであるとされ、恋の句は恋の呼び出しの句、恋の句、恋の句、恋離れの句と並べるのが約束であり、入れる場所は連歌の物語のなかで適宜に決めます。花の句は、花の定座が決まっています、初折の裏の十三句目、二の裏の十三句目、三の裏の十三句目、名残の裏の七句目となっています。表では花は詠まず、裏の最後から二つ目に入れるのです。表から次第に内容を盛り上げて行って、裏の最後から二つ目の花で絶頂に持って来るわけで、それを参加者の呼吸で行なうのが連歌の真骨頂になっています。

内容の展開、特に季節の回し方によって晩春である花が定座に来ない時には、数句引き上げたり、数句零したりすることは容認されていましたが、第三に花が来るのは異例であるばかりでなく、夏山のあとに花であり、季節も逆行しています。初折の表の八句は静かな展開にするのが約束であるので、派手な花を持って来るのはその約束にも反するのですが、どうして紹巴がそのような乱暴をやったのか。